

観念論の問題をめぐる「ゲッティンゲン書評」 に対するカントの応答*

栗原拓也

はじめに

よく知られているように、カントが『プロレゴメナ』(1783)を著した背景には『純粹理性の批判』第一版(1781)に関する最初の書評であった「ゲッティンゲン書評」(1782, 以下「書評」)の存在がある。ガルヴェとフェーダーによるこの書評は、一般に、カントの立場をパークリの「観念論」と同一視したことによってカントの怒りを招くことになったと理解されている。事実、カントは『プロレゴメナ』において辛辣な言葉を「書評」の評者に投げかけながら、それに対する反論を展開するのである。ところで、そうした反論においては、「書評」の批判に対応する形で、やはり「観念論」の問題が主題となる。それによってカントが企図していたのは、自身の立場(「超越論的観念論」)が「書評」の言う意味での「観念論」とは異なるものであり、むしろ彼はそのような「観念論」を批判しているのだと読者に納得させることであった。

しかしながら、カントによる観念論批判の研究において、これまで『プロレゴメナ』の議論は、それほど重要視されてこなかったように思われる⁽¹⁾。なるほど、いくらかの解釈者たちは、カントが「書評」からの批判に答えるために「物自体そのものが存在すること」を前提として明確に打ち出すようになったと考え、『プロレゴメナ』の意義ないし独自性を主張している⁽²⁾。しかし、その場合カントは、単に前提を持ち出して問題を回避しただけだということになってしまう。それだけでなく、『プロレゴメナ』に先行する観念論批判である『純粹理性の批判』第一版の「第四誤謬推理」論との整合性も問題となるだろう。というのも、「第四誤謬推理」論においてカントは外的対象を「物自体そのもの」としてではなく「現象」とみなしていたからである。

このような研究状況を背景として、本稿ではあらためて『プロレゴメナ』

での「観念論」をめぐる議論を考察し、それがどのようなものであったのかを明らかにしたい。そのために、第一節では「書評」によるカント批判を検討し、議論の焦点を確認する。それをもとに、第二節では『プロレゴメナ』における個々の議論を考察することにしよう。あらかじめ展望を述べておかならば、カントは「観念論」について論じるさいに「物自体そのもの」の存在を問題にしているわけではない。そうではなくて、外的知覚が私たちに示す内容は私たちの外にある対象が実際に有している性状とは対応していないのではないかとする「観念論」の疑念に異議を唱えているのである。『プロレゴメナ』におけるカントの仕事は、私たちの認識が「仮象」ではないと示すことにある。本稿によって、「第四誤謬推理」論と『プロレゴメナ』の間にある連続性と「書評」の影響によるいくらかの差異が明らかとなるだろう⁽³⁾。

第一節 「ゲッティンゲン書評」のカント批判

『プロレゴメナ』の「付録」において、カントは「書評」の評者が「私の著作 [『純粹理性の批判』 第一版] について何も理解しなかった」(IV.377)と断じている。そこで、まず「書評」の内容を検討することによって、その『純粹理性の批判』理解が具体的にはどのように誤っていたのか、そしてなぜそれはカントの不興を買うほどの「誤解」であったのかを確認しよう。なお、以下では「書評」の著者としてフェーダーに焦点を当てるが、それは『純粹理性の批判』を貶めるために彼がガルヴェによる元原稿を大きく改竄したという「書評」の出自に基づいている⁽⁴⁾。

さて、一般に「書評」は、カントの「超越論的観念論」をパークリの「観念論」と同一視したために、カントを激怒させたと考えられている⁽⁵⁾。しかしながら、久呉によれば事態はそれほど単純ではない⁽⁶⁾。久呉は「書評」の末尾に注目し、フェーダーからの批判は、普通「私たちが客観とか世界と呼ぶもの」(174)をカントが「私たちのうちなる表象」と称して「客観や世界」から区別する点に向けられていると言う⁽⁷⁾。ここで、フェーダーが「客観(世界)」と対比させた「表象」という語に込めているのは、それが単なる主観的なものにすぎないという意味合いだろう。それゆえに、フェーダーはこの区別を「観念論的な(idealistisch)区別」(a.a.O.) だとして非難するのである。

とりわけフェーダーは、カントがこうした「観念論的区別」を、従来の「観念論」においても確実なものとしてきた「私たち自身」(167)に対してさ

え適用してしまったと訴える。すなわち、普通「観念論」は「考える私」を確実なものとして立てたうえで、その「私」の外にある対象について確実な認識ができるのかどうかを疑い、否定する。「観念論」と言えども、何もかも主観的表象にしてしまうわけではなく、デカルト以降の伝統に沿って「考える私」が「在る」という自己認識だけは確かなものとして認めてきたのである。それに対してカントは、『純粹理性の批判』においてそうした「考える私」の認識を（「物自体そのもの」の認識としては）不可能なものとする。フェーダーはこの点を引き合いに出して、カントが外的対象だけでなく、これまで確実なものとしてきた「私たち自身」という内的対象をも主観的な表象へと転じてしまったと訴えるわけである。そしてこの違いに基づいて、フェーダーはカントの「超越論的観念論」を「より高い観念論」（a.a.O.）と呼ぶ。したがって、「書評」によるカント批判の眼目は、カントとパークリを同一視したというよりも、カントをパークリ以上に徹底した「観念論者」とみなしたという点に存するのである。

そして、カント自身も「書評」の主張を以上のように理解したと思われる。フェーダーによる、外的対象の認識だけでなく、内的対象の認識、したがってあらゆる認識が単に主観的なものになってしまうという非難を、カントは『プロレゴメナ』では次のような仕方では表現している。すなわち、それはカントが主張する「空間と時間の観念性によって、全感性界は単なる仮象に変えられてしまうだろうという反論」（IV.290）である、と。一見して明らかかなように、フェーダーが使う意味での単に主観的なものにすぎないものとしての「表象」を指すために、カントは「仮象」という語を使用している。ここでの「仮象」は、「第四誤謬推理」論において見出されるような、「対象がそれに合致しないような欺瞞的表象」（A376）と並列される「仮象」を指していると思われる。そうした欺瞞的表象としての「仮象」は、カントによれば「想像のまやかし」（夢の場合）か「判断力の過失」（錯覚の場合）に帰されるとされるが、いずれにしても、客観（対象）の性状を捉えたものではないために、単に「私にはそう見えている」というだけの主観的なものにすぎないことになる。言い換えるならば、「仮象」とは他者との意見の一致を求められないような表象なのである。

さて、ここで私たちは「第四誤謬推理」論の観念論批判を思い出さなければならぬ⁽⁸⁾。というのも、そこで「経験的観念論」（A369）を批判するにあたってカントは、この観念論を認めると外的知覚に基づいて客観的な認識（対象がそれに合致する認識）を得ることが不可能になってしまうという問

題意識から出発しているからである。「経験的観念論」によれば、私たちは外的対象を認識するさいに、外的対象を直接知っているわけではなく、ただ私たちの感覚能力を介してその対象の表象を得ているにすぎない。しかし、そうして得られた外的知覚そのものは私のうちなる表象にすぎないのであるから、それがどうして私の外に存在する対象の性状と対応していると言えるのだろうか。このように問い、「経験的観念論」は、外的対象が私たちの感覚している通りには存在していないのではないかと疑うのである⁽⁹⁾。

こうした疑念を、カントは「第四誤謬推理」論において「すべてのいわゆる外的知覚は私たちの内的感覚能力の単なる戯れではないのか、あるいは外的知覚はその原因としての外的現実的对象と関係するのかが、ということはずねに疑わしいままである」(A368)と表現している。ここで、外的知覚が単なる主観的な表象でないことは「外的知覚が外的対象と関係すること」と説明されているが、そうした「表象と対象」の「関係」あるいは「対応」を、カントは認識の「客観的実在性」と呼ぶ⁽¹⁰⁾。それゆえ、カント自身が「第四誤謬推理」論において言うように、彼が反論しようとしているのは、「経験的観念論」がもたらす「私たちの外的知覚の客観的実在性に関する誤った疑念」(A376)ということになる⁽¹¹⁾。

このことを確認すれば、「書評」の非難がいかに誤解に満ちたものであったかは明らかだろう。カントは「経験的観念論」に対して、私たちの外的知覚の客観的実在性を、すなわち外的知覚が妄想のような単なる主観的な表象(=「仮象」)ではないことを示そうとしていた。「書評」はその意図とは真逆に、カントが普通の「観念論」と同様に外的知覚の客観的実在性を否定したと考えるだけでなく、普通の「観念論」ですら認める自己認識の客観的実在性さえも否定するような立場を彼に帰そうとしたのである。もちろん、カントはどちらの客観的実在性も認めている(ただし「現象」としてであるが)。それゆえ、これほどまでに自らの意図を歪めた批評に対して、彼が反発を覚えるのは当然のことだと言えよう。しかし、それ以上にカントは、このような深刻な誤解に対して早急に対応する必要性を感じたにちがいない(とりわけ「書評」は最初に公開された『純粹理性の批判』に関する批評だったため、その影響を考慮するならば尚更であろう)。だからこそカントは、『プロレゴメナ』においてあらためて「観念論」の問題を取り上げることになったのである。

以上のように「書評」の非難を理解するならば、『プロレゴメナ』において展開される「書評」への反論は、私たちの認識が「仮象」ではないとい

うことを示すものでなければならない。次節では、実際にカントが『プロレゴメナ』において、そうした観点から自らの立場と「観念論」の違いを訴え、自らに投げかけられた非難に対して応答していたということを提示したい。

第二節 『プロレゴメナ』における議論

(1) 問題の連続性——第13節注解と第49節

前節で言及したとおり、そもそも「第四誤謬推理」論においてカントが「経験的観念論」を批判したのは、彼らの主張を認めてしまうと、私たちの外的知覚が主観的なものにすぎないことになってしまうからであった。『プロレゴメナ』においてカントが自らの立場と「観念論」あるいは「より高い観念論」との違いを示そうとするさいにも、基本的には「第四誤謬推理」論同様に、カントの立場だけが外的知覚の客観的実在性を保証しようという点にその根拠が求められている。

そうした議論の連続性をもっとも明確に読み取れるのは、第13節注解2と第49節の議論だろう。第13節注解2において、カントは「観念論」を次のような主張をする立場として定式化している。すなわち、「思惟する有を除いては何ものもなく、私たちが直観において知覚すると信じているそれ以外の物は単にその思惟する有における表象にすぎず、この表象には、この有の外にあるいかなる対象も実際には対応していない、という主張」(IV.288. f.)が「観念論」である。明らかなように、ここで「観念論」は「第四誤謬推理」論で批判されていた「経験的観念論」と同様に、表象(外的知覚)と対象との「対応」、すなわち外的知覚の客観的実在性を否定するものとして特徴づけられている。

そして、カントは「第四誤謬推理」論に対応する第49節の冒頭で、「私たちの外的知覚には、私たちの外にある何か或る現実的なものが単に対応するだけでなく、また対応しなければならないということが「経験のためには十分に証明されうる」(IV.336)と述べる。すなわち、「物自体そのもの」としての外的対象ではなくて、経験の対象としての外的対象(「現象」)についてならば、外的知覚は客観的実在性を有するとカントは断言する。その根拠となるのは、やはりその直後で述べられる感性的直観の形式としての空間であろう。ただし、この点については後述することにした。むしろ第49節独自の論点として興味深いのは、そこでカントが批判対象として「デカルト

的観念論」(a.a.O.)を挙げ、その問題点に言及していることである。

カントによれば、この「デカルト的観念論」は、「ただ外的経験を夢から区別し、外的経験の真理性の基準としての合法性を、夢の無規則性と偽りの仮象から区別するにすぎない」(IV.336f.)。つまり、「観念論」の立場に立っても、夢と現実の区別をすることは一応できる。というのも、規則性のある表象を現実、規則性のない表象を夢とすればよいからである。しかし、「ただ～すぎない(nur)」という表現からも分かるように、これだけでは不十分だとカントは考える。彼が問題視するのは、夢と現実を単に規則性によって処理するかぎり、「デカルト的観念論」が、「経験は想像からの区別の確かな基準を持ち合わせているのか」(IV.337)と問い続けることになる点である。すなわち、「想像」や「妄想」は「私には規則性を持って見えている」という主観的なものにすぎないとはいえ規則性を伴っている。「デカルト的観念論」は、こうした「主観的な規則性」を持つにすぎない「想像」と「客観的な規則性」を持つべき「経験」を区別できないとカントは言っているのである。言い換えるならば、「デカルト的観念論」が夢から区別している外的経験は、カントからすれば「想像」が持つ規則性と変わらない、「経験」に依存する「主観的な規則性」を備えているだけにすぎない。そうした「規則性」の普遍性は、よく見積もっても経験からの比較的普遍性(vgl. B3f.)にすぎず⁽¹²⁾、「経験」に求められる厳密な、真の「客観性」を基礎づけられないだろう。結局のところ「デカルト的観念論」によってはカントが追求していること、すなわち「外的経験」が「仮象」(あるいは「想像」や「妄想」)ではなく、外的対象と対応しているということが保証されないのである。このような「デカルト的観念論」批判は「第四誤謬推理」論においては見られなかったものであり、カントが「書評」の非難を意識して言及したと考えることもできるだろう。つまり、この点を明確にしておくことでカントは、真に外的知覚を「仮象」としてしまうのは自分とは異なる「観念論」であり、むしろ自分は『純粹理性の批判』第一版から一貫してその問題点を批判してきたのだと訴えようとしているのではないか。いずれにせよ、ここにおいてもカントの問題意識は外的知覚の客観的実在性の問題にある。

同様の問題意識は、第13節注解3においては、微妙な違いをもって定式化されている。すなわち、カントは「書評」の反論を「空間と時間の観念性によって、全感性界は単なる仮象に変えられてしまうだろうという反論」(IV.290)と言い直したうえで、この反論に答えようとしているのである。注解2および第49節との違いは、それらが「第四誤謬推理」論以来の問題

意識にしたがって外的知覚だけを問題にしていたのに対して、ここでは「書評」の「より高い観念論」という非難に対応して、外的知覚に内的知覚（私自身の存在の認識）をくわえた「全感性界」を「仮象」にしてしまうのではないか、という反論に向き合おうとしている点にある。

それでは、カントは『プロレゴメナ』において、いかにしてこれらの反論に答えているのだろうか。換言すれば、いかにしてカントは、自らの立場が外的知覚および内的知覚を「仮象」に転じてしまうものではなく、それらに客観的实在性を認めうるものだということを説明するのだろうか。この点については、「書評」に対する直接的な批判を含む「付録」の議論に注目すべきだと思われる。

(2) 「書評」への反論——「付録」

「付録」においてカントは直接的に「書評」について言及しているが、とりわけ彼の「超越論的観念論」が「より高い観念論」とみなされたことに対して反論を行っている。カントによれば、従来の観念論者の主張は「感覺能力と経験によるすべての認識は単なる仮象に他ならず、純粹な悟性と理性の観念のうちのみ真理はある」(IV.374)と定式化されうる。確かにパークリに代表される普通の「観念論」は、外的知覚を疑いつつも、「考える私」が存在するという点に関しては、感覺によらない確實性を認めているのであった。それに対して、カントの「超越論的観念論」は「単なる純粹悟性あるいは純粹理性に基づく物についてのすべての認識は、単なる仮象に他ならず、経験のうちのみ真理はある」(a.a.O.)と考えるものである。両者の定式を比べれば、カントが外的知覚の客観的实在性に関して従来の「観念論」と反対の立場を取っていることは明らかであろう。また、自己認識に関して、カントは経験を介して知られるかぎりでの、「現象」としての（つまり「コギト」ではない）「私」の認識にだけ客観的实在性を認める点で、「観念論」とは意見を異にしていることが分かる。この論点ゆえにカントは「より高い観念論」と非難されたのではあるが、以上の定式を見れば、彼に対して「すべてを仮象に転じてしまった」と批判するのは誤りだということになる。それではなぜ、カントは「経験のうちのみ真理はある」と言えるのだろうか。

さて、そもそもカント自身が自らの立場を「超越論的観念論」と呼ぶ以上、彼の主張には「観念論」と言いうる部分がある。それは、空間と時間を「物自体そのもの」、あるいはその性質とはみなさずに、単に物の「現象」に属するものだとして理解する点である（空間と時間の「観念性」）。ただし、カント

と従来の「観念論」においては、空間と時間の源泉をどこに見据えるのかが異なる。その差異こそがむしろ重要なのであり、カントもまたここでそれを強調している。すなわち、従来の「観念論」は空間を「ただ経験あるいは知覚を介してのみ私たちに知られるような、単なる経験的表象」(a.a.O.)とみなす。結局のところ、こうした「観念論」は空間と時間を「物自体そのもの」と想定しているのであるが、それを知るためには知覚を介さなくてはならないから、それらは「単なる経験的表象」だと言っているにすぎない。それに対してカントは、空間と時間を「すべての知覚あるいは経験に先立って、私たちの感性の純粹な形式として私たちに内在し、そして感性のすべての直観、したがってまたすべての現象を可能にする」(IV.375)ものとして、ア・プリオリな表象と捉える(空間と時間の「超越論的観念性」)。つまり、従来の「観念論」は空間を「経験によって与えられるもの」とみなしたが、カントは空間(と時間)を「経験を可能にするもの」、それゆえに「ア・プリオリなもの」とみなすという違いがある。

この違いから、次のことが帰結する。まず、カントによれば、真理とは「その基準としての普遍的で必然的な法則に基づく」(a.a.O.)ものである。それゆえ、パークリのような「観念論」においては、経験はいかなる真理の基準も持たないことになるだろう。というのも、必然的なものは経験によってではなくア・プリオリに与えられなければならないとカントは考えるが、「経験の現象に対して(パークリによっては)何ものもア・プリオリに根底に置かれなかったから」(a.a.O.)である。したがって、パークリのような「観念論」においては、真理の基準が与えられないことによって、経験は単なる「仮象」にならざるをえないことになる⁽¹³⁾。それに対してカントの場合には、経験を可能にするものとしての「空間と時間は(純粹悟性概念との結合において)、ア・プリオリにすべての可能的経験にその法則を指定し、そうした法則は同時に、経験において真理を仮象から区別する確実な基準となる」(a.a.O.)と言われうる。こうした法則の必然性ゆえに、カントにおいては「仮象」と区別された「真理」が認められるのである⁽¹⁴⁾。

ところで、カントにおいて「真理」は「認識と対象の一致」のうちに存する(vgl. B82)。やはり認識は、それが或る対象についての認識であるかぎり、その特定の対象への関係を持っているのでなければ、真なる認識とは言えないのである。そして、私たちの認識が対象と関係していると考えるとき、その認識はいわば「対象によってそのように表象されるように強いられている」という一定の必然性を持っているはずである。すなわち、対象がそのように

あるからこそ、私たちの認識もいま表象しているようにその対象を表象しなければならなかったのだ、と。したがって、私たちの認識が対象と関係しているとみなされるならば、私たちの認識は、偶然的あるいは恣意的に規定されているのではなくて、必然的な仕方でも規定されていなければならない。ここでカントは、経験を可能にし、それゆえにあらゆる経験の根底に存するような法則の必然性をもって、そうした必然的な仕方での規定を説明する。それによって、カントは「真理」ないし「認識と対象の一致」を説明しているのである⁽¹⁵⁾。

このような、経験を可能にする制約（空間・時間とカテゴリー）は必然的に「現象」と関係するという思想こそが、カントが批判期において至った「コペルニクス的転回」の核心であった。実際、カントは「第四誤謬推理」論においても、この立場から『プロレゴメナ』と同様の仕方でも外的知覚の客観的実在性を保証しているのである。ただし、「第四誤謬推理」論では、この論点は明確には説明されていない⁽¹⁶⁾。それゆえ、この点については、『プロレゴメナ』における観念論批判の方がより丁寧に説明されていると言えよう。ここにまず、「第四誤謬推理」論と『プロレゴメナ』の間にある些細にも思われるが確かな差異を見出すことができる。

しかし、真に重要であるのは次の違いであろう。すなわち、カントは「第四誤謬推理」論とは異なり、『プロレゴメナ』の議論においてはつねに「時間」を「空間」と並列しているのである。確かに「第四誤謬推理」論においては、外的知覚の客観的実在性を否定するものとしてのみ「観念論」が問題にされていたので、そこでカントは感性的直観の形式として「空間」を挙げるだけでよかった。しかし、『プロレゴメナ』のカントにとって、それはもはや十分ではない。「書評」によって外的知覚だけでなく自己自身の認識までも「仮象」にしてしまったと糾弾された以上、『プロレゴメナ』ではそちらについても説明しておく必要がある。批判期のカントが認める自己の認識とは、あくまでも感覚される「私」についての認識なのであるが、カントによれば「時間」こそが内的直観の形式なのであった。つまり、ここでカントが「時間」を併記するようになったことは、「書評」への応答として理解できるのである。

以上に挙げた二つの違いからは「書評」のような誤読を防ごうとするカントの意図が伺われるが、私たちはここに「書評」がカントに与えたインパクトの帰結を見ることができる。つまり、カントは「第四誤謬推理」論の観念論批判を変わずに保持しているし、いくらかの解釈者が主張するように「物

自体そのもの」の存在を前提として前面に打ち出すことで自らの批判哲学に変更を加えたわけでもない。しかし、「書評」を受けて、カントは『プロレゴメナ』においてより入念な説明をし、また自己自身の認識にも注意を向けるようになったのである。この点に関連して、最後に触れておきたいことがある。それは、こうした自己認識をめぐる「書評」ないしフェーダーとの対決が持つ意義についてである。

確認したように、フェーダーはカントが「考える私」としての「私」についての認識を否定したことに基づいて、カントが「私たち自身」をも単なる表象に転じてしまったと訴えるのであった。ところで、「書評」はそうした観点から「第四誤謬推理」論についても、わずかにではあるが批判的に触れている (vgl. 171)。それによれば、カントは外的感覚が物体の「絶対的述語」を教えないのと同じように、内的感覚も私たち自身の「絶対的述語」を教えないと考える。それによって「物体の存在についての確信」に対する「私たち自身の存在についての確信」が有していた優位性が失われ、「観念論」の前提は崩れることになるのだ、というのが「第四誤謬推理」論である——もちろん、このような理解はカントが「第四誤謬推理」論に込めた本来の意図に即したものではない。しかし、フェーダーの解釈のうちには一つの気づきがあり、それも鋭い気づきがあると言えないか。それは、「第四誤謬推理」論の観念論批判が「考える私」の存在証明の不可能性と密接な関わりを持っているということである。

従来、「考える私」が「在る」という認識は、「観念論者」でさえも疑いえない、単なる経験とは異なるものだとされてきた。批判期のカントは、そうした自己認識をあくまでも感覚される「私」についての認識としたからこそ、「第四誤謬推理」論において外的経験と同列に置いたのである。このことは、やはりデカルト以降の伝統においては衝撃的なことであり、フェーダーが異を唱えるのも無理からぬことであろう。それゆえに、カントは「書評」の非難をきっかけとして、「観念論」に対する議論においても自己認識について論じる重要性をあらためて意識したにちがいない。こうして、『純粹理理性の批判』第二版 (1781) の「演繹論」では、「考える私」についての考察がさらに掘り進められ、そのようなものとしての自己を認識する可能性が徹底的に批判される。そして、内的経験は外的経験によって可能になるとされる「観念論論駁」において、ついに自己についての経験と外的経験の優位性が逆転するのである。このように考えるならば、「書評」がカントに投げかけた非難こそが、「第四誤謬推理」論から「観念論論駁」増補へとカントを突

き動かした契機であったと言えるのではないだろうか。

おわりに

以上の考察から、『プロレゴメナ』における「観念論」をめぐる議論の内実が明らかになった。すなわち、そこには「第四誤謬推理」論からの連続性と「書評」の影響による差異が見出されるのである。前者について言えば、「観念論」に反対して外的知覚の客観的実在性を保証しなければならないという「問題意識」と、「コペルニクスの転回」に依拠したその保証の「仕方」（あるいは観念論批判の「仕方」）において、カントは「第四誤謬推理」論から一貫している。他方で、『プロレゴメナ』においては「書評」による「より高い観念論」という非難を受けて、自己自身の認識についても言及されるようになるのであった。この部分に「書評」に対するカントの応答を認めることができるだろう。こうした本稿の成果から、従来の二つの解釈タイプについては次のように言わなければならない。

第一に、『プロレゴメナ』では「書評」の非難を回避するために「カントが物自体そのものの存在を前提として明言するようになった」という「変節」を見出す解釈がある⁽¹⁷⁾。確かにカントは『プロレゴメナ』において、私たちの認識から独立して存在する物が存在し、それが私たちの感覚能力を触発することによって表象が生じるのだと述べてはいる (vgl. IV.289)。しかし、ここで私たちは、「物自体そのもの」の存在を想定することは、カントが「観念論」のうちに見出した「外的知覚の客観的実在性」の問題を解決しない、あるいはこの問題とは関係がないという点に注意すべきだろう。たとえ「物自体そのもの」の存在を想定しても、やはり私たちはそれを直接的に知ることができないのだから、感覚能力を介して得られた外的知覚が客観的なものであるかどうかという問題は変わらずに残ることになる。また、「感覚能力を触発する物自体そのもの」の想定は「第四誤謬推理」論においてすでに見られる (vgl. A372) のだから、この点についてはそもそも変化は存在しないのである。確かに『プロレゴメナ』には変化が見出されるが、それはこの解釈が主張するような「物自体そのもの」に関わるものではない。

第二に、カントの観念論批判を考察するさいに『プロレゴメナ』を重視してこなかった解釈がある。そうした解釈は、『プロレゴメナ』には一見して「第四誤謬推理」論と比べて大きな変化が見られないということに依拠していると思われる⁽¹⁸⁾。しかしながら、本稿が指摘したように、『プロレゴ

ーメナ』には「第四誤謬推理」論と比較して「書評」の非難を意識した差異が存在するのであった。それゆえに、カントによる一連の観念論批判を解釈するうえで『プロレゴメナ』を考察することの意義が認められるべきだろう。本稿では、まさにその検討によって「観念論論駁」増補への見通しが得られたのである。

ところで、「観念論」の批判に関して言えば、「第四誤謬推理」論と『プロレゴメナ』の間には「問題意識」「批判の仕方」ともに明らかな連続性が見受けられた。ところが、「観念論論駁」において、カントは明らかに「第四誤謬推理」論や『プロレゴメナ』とは異なる観念論批判を展開している。しかし、そこでなされた変更が、カント自身が述べる通りに「ただ証明の仕方においてのみ」(BXXXIX.Anm.)であるとすれば、「観念論」を批判するさいの「問題意識」は変わらずに保持されていると考えることができるだろう。すなわち、「観念論論駁」もまた「外的知覚の客観的实在性」をめぐる議論として理解されるのではないか——しかしながら、この点については別稿を期すことにしたい。

注

* カントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集より巻数・頁を記す。ただし『純粹理性の批判』からの引用は慣例に従って、第一版をA、第二版をBの記号で示し、原書の日を付す。引用文中の [] 内は筆者による補いである。また筆先傍点は筆者による強調を示す。

(1) たとえば、ハイデマンは「観念論論駁」の成立史的背景として「書評」に端をなす論争に注目しているが、『プロレゴメナ』の議論そのものについては踏み込んだ検討をしていない。Heidemann, *Kant und das Problem des metaphysischen Idealismus*. Berlin: Walter de Gruyter, 1988, S. 88.

(2) この例としては、ハラミヨ (Hoyos Jaramillo, *Kant und die Idealismusfrage: Eine Untersuchung über Kants Widerlegung des Idealismus*, Mainz: Gardez! Verlag, 1995, S. 183-4) や、ターベイン (Turbayne, *Kant's Refutation of Dogmatic Idealism*, in: *The Philosophical Quarterly* 5, 1955, p. 238) などが挙げられる。またルセは、『プロレゴメナ』だけでなく「第四誤謬推理」論のうちにも「物自体そのもの」の存在の想定による観念論批判を見出そうとしている (Rousset, *La doctrine kantienne de l'objectivité: l'autonomie comme devoir et devenir*, Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 1967, pp. 145-7)。これらの解釈の背景には「外的対象を単なる現象とみなしたために、「第四誤謬推理」論は観念論の批判に失敗している」という見解が共通してあると思われる。すなわち、そうした失敗を自覚したカントは、「観念論」に抗するために「物自体そのものの存在」を前提するしかなかったというわけである (本稿はこうした見方に反対する)。なお、「第四誤謬推理」論を失敗した観念論批判とみなす解釈に対する反論としては、以下の拙稿を参照。「第四誤謬推理」論と外的知覚の客観的实在性」、『日本カント研究』(日本カント協会)第16号、2015年。

(3) 本稿と同様に、「書評」がカントに与えた影響に注意を払いつつも、それによってカントが『プロレゴメナ』において自らの批判期の立場に変更を加えたわけではないと考える論考として以下のものがある。Mensch, Kant and the Problem of Idealism: On the Significance of the Göttingen Review, in: *The Southern Journal of Philosophy* 44, no.2, 2006. とりわけ『プロレゴメナ』のうちに、「物自体そのもの」の存在を前提として明確に主張するようになったというカントの「変節」を見出す解釈に反対するという点で、本稿はメンシュと同じ志を持って続くものである。ただし、後述するように、カントの観念論批判の詳細について本稿はメンシュと理解を異にする。

(4) Heidemann, *ibid.*, S89. ならびに小谷英生「隠された友情——『ゲッティンゲン書評』をめぐるカント・ガルヴェ往復書簡について——」、『群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』第63巻、2014年を参照。

(5) 注2で挙げたハラミヨやターベインもこのような見方をしている。

(6) 久呉高之「プロレゴメナ解説」（『カント全集6 純粹理性批判 下・プロレゴメナ』所収）、岩波書店、2006年、608頁。

(7) 「ゲッティンゲン書評」からの引用は、以下のPhB版『プロレゴメナ』に付録として収録されているテキストの頁数を付す。Kant, *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik*, Hamburg: Felix Meiner, 1976. また「ゲッティンゲン書評」には次の邦訳があり、参照した。城戸淳訳「ゲッティンゲン書評（ガルヴェ／フェーダーによるカント『純粹理性批判』書評）」、『知のトボス』（新潟大学人文学部哲学・人間学研究会）第3号、2008年。

(8) 本稿における「第四誤謬推理」論解釈の詳細については、注2の拙稿を参照。

(9) 以上のように主張するとき、「経験的観念論」は外的対象を「物自体そのもの」とみなしているとかントは指摘する（vgl. A369）。そのように外的対象を捉えるかぎり、感覚に依拠して外的対象の性状を知ることが不可能であろう。しかし、そうした「超越論的實在論」的な「外的対象観」は誤りであり、私たちの認識対象としての外的対象は「物自体そのもの」ではないというのが「第四誤謬推理」論における観念論批判のポイントである。「超越論的實在論」に対して「超越論的観念論」に立つカントは、あくまでも外的対象を「現象」すなわち「表象」とみなす。

(10) たとえば『シェーン形而上学』（1785-90）においては、「客観的實在性とは、或る思惟に或る客観が現実に対応するという思惟の性質」（XXVIII,492）であると説明されている。

(11) 「純粹理性の批判」においてカントがこうした問題意識から「経験的観念論」を批判した理由については、その帰結を考えることで明らかになるとと思われる。そもそも、私たちは外的対象（自然）の内実について、外的知覚を介して経験的に知ることしかできない。つまり、私たちの外的世界についての知識は外的知覚に依拠しているのである。それゆえ、「経験的観念論」の主張が真であるならば、私たちは外的知覚に基づいて、自然に関する他者と共有するような認識を持つことができないことになってしまうだろう。それは、アリソンが指摘しているように、自然を対象とする科学が不可能となることを意味する（Henry Allison, Kant's Critique of Berkeley, in *Journal of the History of Philosophy* 11, 1973.）。この帰結は、『純粹理性の批判』において経験の可能性を追求し、それによって学としての自然学を基礎づけようとするカントにとって看過できないものである。

なおメンシュもまた「第四誤謬推理」論に関連して「實在性」概念に注目しているが、そこではカテゴリーとしての「實在性」概念が取り上げられている（Mensch, *ibid.*, pp. 301-3.）。しかし、檜垣が説明するように、質のカテゴリーとしての「實在性」と認識の「客観的實在性」は区別されなければならない。「物」の形式たるカテゴリーとして、前者は「物」について言われる。それに対してここで話題とされる「客観的實在性」は注10でも確認したように「思惟」「性質」であるのだから、「認識」ないし「表象」について言われるものである。檜垣良成『カント理論哲学形成の研究——「實在性」概念を中心として——』、

溪水社、1998 年を参照。

⁽¹²⁾ しかも、この比較的普遍性ですら、ア・プリオリな総合的判断がまずもって確立されていなければ、本当は言うことができない。

⁽¹³⁾ もちろんこれはカントの立場からの指摘であり、パークリは同意しないだろう。彼によれば、私たちの感覚は「神」の精神によって一定の秩序のうちにあるものとして表象されることで、間主観性ないし公共性を持つ (cf. 『人知原理論』第一部第 29-33 節)。それゆえ、パークリにおいても感覚は「仮象」ではない。ただし後述するように「真理」ということで「認識と対象の一致」を理解するカントにとって、認識の客観性は間主観性によって保証されるものではなく、むしろ認識が対象と一致するがゆえに間主観性は見出されるのである。

⁽¹⁴⁾ こうした必然的な法則と、「デカルト的観念論」が夢と現実を区別するさいに持ち出す経験に依拠するだけの「規則性」は、ア・プリオリに現象の根底に置かれることによって生ずる厳密な必然性という点で異なるものである。

⁽¹⁵⁾ 角忍「超越論的演繹の証明構造」、『高知大学学術研究報告（人文科学その 1）』第 38 卷、1989 年、282-3 頁を参照。

⁽¹⁶⁾ 「第四誤謬推理」論においては、『純粹理性の批判』第一版におけるその配置上、カントは「第四誤謬推理」論に先行する議論を説明し直すことなく、確立された教説として扱っていると考えられる。この点で、節だけを切り離して読む場合には、「第四誤謬推理」論の議論は明確さを欠くことになる。

⁽¹⁷⁾ 注 2 を参照。

⁽¹⁸⁾ 注 1 で挙げたハイデマンがその典型である。

(くりはら・たくや 筑波大学大学院一貫制博士課程
人文社会科学部哲学・思想専攻)